

気象庁地震観測所

(松代地下大本営跡)

第二次世界大戦の末期、軍部が本土決戦最期の拠点として、極秘のうちに、大本営軍司令部 参謀本部 政府各省等をこの地に移すという計画のもとに、昭和十九年十一月十一日午前十一時着工翌二十年八月十五日の終戦の日まで、およそ九ヶ月の間に当時の金額で二億円の巨費と延二百万人の住民及び朝鮮人の人々が労働者として強制的に動員され突貫工事をもつて構築したもので全工程の75%完成した。

ここは地質学的にも 堅い岩盤地帯であるばかりでなく、海岸線からも遠距離にあり、川中島合戦の古戦場としても知られているとおり要害の地である。

規模は三段階、数百米に亘る、ペトン式の半地下建造物、舞鶴山を中心として、皆神山、象山に甚ぶ大地下壕である。

現在は世界屈指を誇る気象庁の地震観測所として使用され、高倍率のひずみ地震計はじめ各種高性能観測機が日夜活躍している。

長野市観光課